

部位であり、また原発性骨腫瘍の発生頻度も高い。しかしながらこの部に発生する病変は、その解剖学的位置および骨が主として海綿質より構成される点よりX線読影にしばしば困難を感じる。

1964年来教室においては、この部位の骨疾患にたいし bone marrow scanning の応用を行なってきた。本法は腫瘍、炎症の如何を問わずいづれの病変も欠損像として描記するという鑑別診断上の欠点を有するが、局在診断率は90%以上であり、病変の拡りを明確に捉えるという点で治療方針の決定に重要な情報を提供するものである。

bone marrow scanning に関する現在までの研究知見につき要旨を述べる。

特別発言

鉄動態および^{99m}Tc骨髓スキャンからみた骨髓機能

岡山大 平木内科 岩崎 一郎 吉岡 博夫

従来鉄欠乏性貧血や再生不良性貧血を中心として造血機能検査の重要な一翼をなってきたのは Huff, Polly-cove らによって改良応用されるに至った⁵⁹Fe 鉄動態で

あった。一方ではアイソトープ技術の発達が Anger らの手で医学に導入されて、scintillation scanner, scintillation camera および¹⁹⁸Au, ^{113m}In, ⁵⁹Fe, ^{99m}Tc が日常の患者診療に駆使しうるようになってきた。この時にあたって演者は従来の諸種血液学的検査方法と鉄動態に^{99m}Tc 硫黄コロイドを用いた骨髓スキャニングとを組み合せて諸種血液疾患における^{99m}Tc 骨髓スキャンの表現型について解析を加えた。その結果最も興味ある所見としては、再生不良性貧血に二型を区別しえたことである。1つは骨髓内血球抑留型や摘脾後にみられるもので長管骨を中心とした高濃度の島嶼状陰影であり、他は骨髓脂肪化を裏付けるごとき淡調の瀰漫性陰影であった。前者の骨髓への⁵⁹Fe 摂取、赤血球鉄利用率は骨髓機能低下の割には健康人に近いが、抑留と PIDT の延長が認められた。後者のは典型的な再生不良性貧血型の鉄動態を示し、赤血球鉄利用率の低下も著明であった。

その他白血病、赤血病、骨髓腫、先天性溶血性貧血などについても報告する。